

WCRP

3

2023
March

No. 521

World Conference of Religions for Peace Japan



IPCR 国際セミナー（上）とアジア・ユースピースキャンプ（下）

こころの扉—「非暴力という“武器”を用いた戦争」金子昭	2
トルコ・シリア地震への緊急支援	3
「IPCR国際セミナー2022」を開催	4～5
「アジア・ユースピースキャンプ2022」 in フィリピン	5～6
平和研究所 第8回研究会 藤本頼生所員	7
JNATIPオンラインセミナー	7
『平和のための宗教 対話と協力15』を発刊	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「非暴力という“武器”を用いた戦争」

ジーン・シャープ著『独裁体制から民主主義へ』は、とても啓発される著作である。今年1月、中見真理氏の解説により「100分de名著」(NHKテレビ)でも紹介された。シャープ氏が推奨するのは、暴力を用いない平和闘争である。そこにあるのは、非暴力こそが「武器」となる逆転の発想だ。この発想の淵源は、ガンディーがインド独立のために自ら指導して行った非暴力・不服従の運動にあった。

シャープ氏は非暴力闘争のことを、様々な戦術・戦略

WCRP日本委員会
平和研究所
大野さと子教授

金子 昭



を駆使した「暴力なき戦争」と規定した。この戦争は、暴力の代わりに、心理的・社会的・経済的・政治的な武器で闘い、その闘いも複雑で多岐にわたる。シャープ氏は、そうした非暴力行動の方法を実に198通りも示している。これらの方法は現実に対応したもので、独裁体制下の多くの国で実践され、成功例には独裁者を倒したセルビアの民主化運動、リトアニアの独立回復運動などがある。

宗教者こそ非暴力の運動の担い手である。ガンディー

は非暴力(不殺生)の思想をヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教というインドの宗教的伝統の中から汲み取り、これを植民地体制の圧制下にあつて不服従運動として展開した。彼はインドの状況を知り抜いており、自らも政治的手腕を発揮して運動を巧みに進めた。でも、現実には多くの宗教者はそのように動くことが苦手であり、また精神的なリーダーにはなれても、運動のリーダーであることはなかなか難しいだろう。シャープ氏も、信仰を深め非暴力思想を強化する宗教的非暴力主義者を尊敬しつつ、その非暴力が個人的レベルに留まりがちであることに批判の眼差しを向けている。

しかし何と言っても、宗教者はあくまで宗教者であり、政治家や活動家ではないのだから、私はむしろそれは当然であると思う。だからこそ、宗教者には各界・各階層に対してたゆみなく働きかけて、非暴力の思想を人々に浸透させる使命がある。これは味方になる人々にだけでなく、独裁権力側に対しても同様だ。その場合には、柔よく剛を制する「政治的柔術」も必要になるだろうし、国際的な圧力も時に強く求められよう。ロシアによるウクライナ侵攻の状況を鑑みれば、とくにその思いを強くする。

その意味で、WCRPの役割はますます大きくなるだろう。WCRPは、抑圧に苦しむ人々を自由と解放へと導くべく、宗教者同士の間のみならず、政界・経済界はじめ社会の様々な方面に対話と連帯を呼びかけることが期待される。

トルコ・シリア地震への緊急支援

2月6日のシリア国境と接するトルコ南部で発生した大地震を受けて、WCRP日本委員会は、シリアで支援活動を行う二つの市民団体に支援金の緊急拠出を行うとともに、緊急支援募金の呼びかけを行った。

支援金の拠出先については、日本委員会に關係する方々から寄せられた情報を共有する中で決定した。その中で、日本委員会の徳増公明理事とシリア難民留学生たちから具体的な情報が得られた。

徳増理事からは、日本のイスラムコミュニティにおいて、いち早く情報収集と支援に乗り出しており、大塚マズジド(東京・豊島)や東京ジャーミー(東京・渋谷)が支援活動を実施しているとのことであった。

また、日本委員会は過去5年間にわたりシリア難民留学生の受け入れ支援に取り組んできた。この支援活動のパートナー団体を含めた三者での緊急ミーティングを開き意見を聞いた。留学生たちからは、現地で効果的な支援活動を行なっているいくつかの支援団体の名前が挙げられた。

これらの意見を踏まえ、当面の緊急支援先として、10年以上にわたって内戦が続き、政治的不安定な状況下で被災したシリア北西部で支援活動を続ける以下の二つの団体に決定した。この地域は、シリア政府や国連などの国際機関の支援が届きにくい状況が報告されている。

①White Helmets (ホワイトヘルメット)

正式名称はSyria Civil Defence、メンバーが白いヘルメットを着用することから通称ホワイトヘルメットと呼ばれる。反体制派支配地域で被災者の救助や治療にあたってきたボランティア・チームに起源をもつ団体で、「中立、不偏、人道」を掲げて救出活動を行うその様子は、インターネットなどを通じて世界中に拡散され、欧米諸国で称賛を浴び、ノーベル平和賞候補にもなったという。

②Moham Volunteer Team (モルハムボランティアチーム)

2012年10月6日に設立された、シリア市民によるボランティアグループ。主に、シリア国内で爆撃などの被害を受けた地域、ヨルダンやトルコなど周辺国に暮らす

難民の方々への人道支援、紛争孤児への教育支援などを展開している。国連や国際NGOが支援できない地域でも積極的な支援活動を続けてきており、国内外からその人道主義を高く評価されている。

地震発生から1カ月が経過した時点で、両国を合わせた死者は5万人を超えたと言われている。トルコ国内だけでも政府の発表によると、死者約4万6千人、倒壊あるいは激しく損傷した建物は21万棟を超え、200万人近くが一時的な避難施設に身を寄せ、うち140万人以上がテント生活を送っているとのこと。

また、国連人道問題調整事務所(OCHA)によると、トルコで910万人、シリアで880万人が地震の影響を受け、行方不明者数は両国ともはつきりしていないという。

今後も日本委員会は、WCRP国際委員会や現地で支援活動を行なっている日本のNGOとの連携を模索しながら支援に取り組んでいく。

「I-PCR国際セミナー2022」を開催



ソウル市内の会場にて

総合テーマのもと、日中韓の宗教者、学者など72人が参加した。

I PCR国際セミナーは、韓国宗教平和国際事業団と韓国宗教人平和会議（KCRP）が主催し、WCRP日本委員会の共催で2009年から日本、中国、韓国の宗教者らが毎年集い、東北アジアが直面している諸問題について討議している。

開会式では、KCRP会長のソン・ジンウ氏、戸松義晴WCRP日本委員会理事長（浄土宗総合研究所副所長・浄土宗心光院住職）、そして中国宗教者和平委員会（CCRP）副会長のファソンレロントアンモン氏があいさつ。戸松理事長は、政治的な緊張や気候変動など東北



戸松理事長

アジアを取り巻く諸課題に触れ、自然との調和を大事にしてきたアジアの価値観や宗教が、問題解決にその力を生かせると強調。三国の宗教者がそれぞれの活動に生かしていきたいと本セミナーへの期待の言葉を述べた。

その後、ラカンCCRP事務総長、篠原祥哲WCRP日本委員会事務局長、そしてキム・テソンKCRP事務総長があいさつした。

この後、テーマ別で三つのセッションが行われた。セッション1では、『アジア太平洋運命共同体の構築に、仏教の積極的な役割を十分に発揮する』をテーマにCCRP委員のチュンファ氏（雲南省仏教協会副会長）が発題した。

チュンファ氏は、仏教の華嚴経に由来する調和思想に触れ、精神支援やイデオロギーの原動力となる仏教の知恵をアジア太平洋運命共同体の構築、アジア太平洋の繁栄と安定の推進ために生かしていくことを提言した。



金子所員

また、中国イスラーム協会副会長のダイ・ジュンフォン氏、韓国の平和葛藤研究所所長であるジョン・ジュジン氏、韓国民俗宗教協議会理事のハン・ジェフン氏と共に、パネリストの一人として金子昭・

平和研究所所員（天理大学おやさと研究所教授）が発壇し見解を述べ、意見が交わされた。

金子所員は、チュンファ氏が指摘した「調和無碍、縁起共生」の思想に触れ、現代のグローバル化・多元化した世界では、相異なる人びとや民族、国家相互を緩やかに繋げる共生の縁の世界を構築することが大切で、アジア太平洋地域において新たな国際的共生の善き縁を結び直していくことが求められていると述べた。

セッション2では、『人と自然と神（仏）との対話』をテーマに、アジア学院校長の荒川朋子氏が発題した。



荒川先生

荒川氏は、アジア学院の設立のルーツに触れ、『宗教の壁を越えた「真の対話」による人間性の回復』について説明。人を大きく成長させる「真の対話」（生きた対話、人間らしい対話）は、自然と接しているとき、農と食べものに携わる作業を皆と共に行うとき、私たちの中に秘められている最も美しいものが引き出され、心が豊かに満たされていくのではないかとの見解を述べた。



松井所員

また、中国道教協会副会長のチャン・ガオチェン氏、韓国の天道教のハンウル連

帯前代表のジョン・ヒシク氏、儒教成均館管理部長のソン・ハンナ氏と共に、パネリストの一人として松井ケティ平和研究所員（清泉女子大学教授）が登壇した。

松井所員は、相手を慈しむ心なしでは「真の対話」はありえず、対話のプロセスにはまず自分と相手の人間性に敬意を持つ必要があると主張。対話プロセスのルールに沿って、人、自然と神との対話の形式を表を用いて説明した。そして、互いが納得し、心の平和を得るよう解決しようとするとき、お互いが同じ方向を見て、平安な地球を目指すことが出来るのではないかと語った。



山本理事

セッション3では、『危機次代の宗教』をテーマに、WCRP日本委員会理事の山本俊正氏（元関西学院大学教授）のコーディネートのもと、KCRP声

明平和委員長で韓国の仏教環境連帯緑色仏教研究所所長のユ・ジョンギル氏が登壇。ユ氏は、気候危機に代表される環境問題は、成長社会を越えることが核心であり、そうして成熟の社会に進むのであると主張。しかし、途方もない変化の要求を前に、大きな無力感に苛まれることになるが、感謝の心、天地自然の恵みと隣人への感謝を回復することが遠い道を進む動力であり、自らを維持するエンジンであるとした。

また、韓国のカトリック気候行動運営委



篠原事務局長

員であるメン・ジュヒョン氏、CCRP委員で中国カトリック教会司教協議会外交委員会副委員長のガオ・チェン氏、韓国の圓佛環境連帯執行委員のイ・テオク氏と共に、パネリストの一人として篠原事務局長が登壇した。

篠原事務局長は、成長重視の社会と訣別し、脱成長社会に向かうことが急務であると強調。世界中に点在する小規模のコミュニティが連携すれば大きな力となり得る。その地域における信頼関係の構築において宗教者同士の信頼を高めるアジア宗教者平和会議（ACRP）活動はますます重要性が高まっていると述べた。

翌12日、日本からの参加者は成均館を訪問し、ソン・ジンウ儒教成均館館長（KCRP代表会長）と面会。その後、2022年11月に梨泰院で起こった転倒事故現場を視察し、献花と祈りを捧げた。



ソン・ジンウ KCRP 代表会長と面会



梨泰院に設置された祭壇前にて

「アジア・ユースピースキャンパ2022」 in フィリピン

『平和構築の担い手としてのアジアの青年たち』をテーマに、アジア・ユースピースキャンパ2022が2月5日から8日まで、フィリピン・マニラ市内でRfPアジア（ACRP）、ACRPソウル平和教育センター（SPEC）、アジア&太平洋諸宗教青年ネットワーク（APIYN）、RfP/WCRPフィリピン委員会共催のもと開催された。これにアジア・太平洋地域12カ国から60人の青年が集った。青年部会からは齋藤佑助事務局長（立正佼成会習学部青年ネットワークグループ）ら2人が参加した。

5日、マニラ市内のホテルで行われたパブリット・ベイバド教授（RfPフィリピン委員会）の歓迎あいさつでプログラムが始まった。その後、神谷昌道師



歓迎夕食会でのワークショップ

（ACRPシニアアドバイザー）から祝辞があり、「このユースピースキャンパでの議論の内容を共通の行動に移すことで、リエンジメーカー」にな



パネルディスカッション

るように」と励ましの言葉が青年たちへ送られた。アイスブレイクでは、お互いの名前、国籍、好きなことを語り合うことで、初めての出会いでありながらも、密に互いを知り合う場面があった。

6日は、聖トマス大学で開会式が開かれた。フィリピン国歌斉唱、4人の青年による諸宗教の祈りに続き、キム・テソン師（KCRP事務総長）が開会あいさつに立った。その中でキム師は、「このキャンプを通じて、青年ネットワークの強化やアジアが立ち向かう多様性に富んだ諸課題への取り組みを目標に参加してほしい」と述べた。基調講演ではフィリピン共和国議会議員のリアン・シソン教授から、青年リーダーとして、アジアの諸課題へと向かう心構えを共有するよう促された。

全体会議の中では、パネルディスカッションが行われた。第一部では、『人身売買』をテーマにパネリスト5人がそれぞれの活動の中で感じた「人身売買」の問題について語り、人身売買は、健康的、教育的、



それぞれ書いた彩り豊かな平和のポストイット

法律的な側面で課題が見受けられるという意見があった。その解決策として、①諸課題についてよく学び、深く理解する②宗教者やNGOと連携をとる③メディアを巻き込むこと——が挙げられた。

第2部では、『子どもの権利と平和構築』をテーマに、4人のパネリストが議論した。バン格拉デシュ、パキスタン、インド、スリランカ各国における課題を共有し、青年リーダーとして理解を深めながら各国委員会で協働を呼びかけ、教育を施すことが大事であるとの認識が共有された。

午後の課外活動では、マニラ市内にある末日聖徒イエス・キリスト教会を訪問し、フィリピンの歴史的建物などを見学。その後、実際にミンダナオ島で「子ども兵士」に出会った体験を持つ人の話を聴講し、子どもの権利について各国でどのような課題があり、私たちは何ができるのかを小グループに分かれて話し合った。

7日は、聖トマス大学で研修とワークショップが行われた。研修では、互いの宗教や尊厳、意見や性別の違い

などを大切にするのが確認され、『自分にとって平和とは？』をテーマに各テーブルで考えが共有された。その後、平和に対する考えを一言でポストイットに記入し、全体で共有した。

午後は、レントツ・アルガオ博士（APIYNモデレーター）が『青年によるリーダーシップ』と題し発題。WCRP国際委員会やACRPの展望、国際青年委員会（IYC）やAPIYNの役割について説明を受けた。

続いて、小グループに分かれて2日間の学びを基に、どのような課題があり、それを具体的に学ぶためのプログラムを企画するワークショップが行われた。その後、神谷師よりワークショップの講評があり、「皆さんは確実にリーダーとしての自覚が芽生え、アジアの諸課題に対して具体的に考えられることができるようになった。残すは各国に戻った後、行動に移すだけ」とエールが送られた。

最後に、今回のユースピースキャンプの総括として声明文が読まれ、それぞれがどのように行動していくのかを全体で確認した。

8日、参加者はそれぞれ帰路に立つとともに、APIYNコアメンバーは、今後のユースピースキャンプなどの運営、活動を具体的にどう展開していくのかについて会議を行った。

平和研究所 第8回研究会

藤本頼生所員

平和研究所の第8回研究会が2月28日、オンラインで開催され、藤本頼生所員（國學院大學教授）が『神社と社・モリの語義について』と題して発表した。

はじめに藤本所員は、「もり」という言葉について詳述。古代の文献では「神社」や「社」と書いて「もり」と読ませるものが存在していることから、「神が鎮座する依り代になるような特別な木々の密生地を古代の人は『社』の字を用い、一般的な『森』と区別したのではないか。さらに『神社』と書いて、神が居ます森であることを具体的に指示したと考えられる」と説明した。

また、「『ご神木』についても言及。「神霊の存在を感じる特殊な樹木、大木となっている樹木に対して、神霊の表象として『ご神木』と崇め、神霊を奉斎するための社殿ができたあとも、神霊の宿るものとして『ご神木』が神聖視されるようになった」と語った。

さらに、山や水、木や森が人びとの生活と密接な関係を持っていたからこそ、人びとはそこに霊的なものを感じて、農耕や山仕事に携わる中で宗教的な信仰心が生まれていったのだろうと指摘し、「ご神木」は決して安易な自然崇拜ではないと述べた。

一方で近年、とくに若い人びとの間で「ご神木ブーム」が起きており、木に触ったり、抱きついたりすることで、靴で踏んだ木の根が傷つき、樹勢が衰えてしまう被害が各地でみられると注意を促した。

最後に、神社林の存在意義として、とくに都市部では防火、防音、輻射熱遮断などの効果が実証されており、さらには森林セラピー効果として、人びとの心の安らぎに役立っていると語った。

ただし、最近は道路拡張や住宅、工場、電波塔建設などの公共事業の名目で境内林が失われている傾向があり、風が吹き抜けてしまい「お焚き上げ」ができなくなる、境内の縮小により人びとの密集化をきたすのでお祭りの形態が変わるなどの影響が出ている現実も指摘した。

JNATIP オンラインセミナー

人身売買禁止ネットワーク（JNATIP）の連続オンラインセミナーが2月4日と同23日に開催された。メインテーマは『人身取引のない社会をつくる！』私たちの意識が法律、制度をつくる！』。

第1回は『性暴力・性搾取のない社会に向かって』女性支援新法の役割、現場からの声』をテーマに3人が講演。吉田容子氏（JNATIP共同代表）が『人身取引と法

律』について発表し、困難な問題を抱える女性への支援に関する法律の成立と売春防止法の差別的な理念を変えることができたことは大きな成果だが、実効性のある法律になるかは今後の取り組み次第と述べた。

次に、坂本新氏（NPO法人レスキュー・ハブ理事長）が『可視化されにくい性的搾取の現状と課題』と題して発表。新宿の支援現場の実情を踏まえ、すべてに共通する支援の公式はないと語った。

熊谷真弓氏（慈愛寮施設長／精神保健福祉士）による『女性支援新法施行に向けて』婦人保護施設はどう変わるのか、どう変わるうとするのか』という発表では、支援を受ける際の法律や窓口によって将来が変わってしまうことなどを指摘した。

第2回は『技能実習制度廃止の先には外国人労働者とともに歩む社会を！』がテーマ。旗手明氏（自由人権協会理事）が『技能実習制度は持続可能か』ローテーション政策の限界』と題して発表し、外国人労働者を短期間で入れ替える政策を問い直し、日本が移民社会であることを自己認識してこそ適切な人権保障につながると述べた。

鳥井一平氏（JNATIP共同代表）は『奴隷労働根絶は民主主義の約束』と題する発表の中で、制度によって移動や転職を制限することは奴隷労働と変わりないと主張した。

『平和のための宗教』

対話と協力15』を発売

平和研究所から『平和のための宗教 対話と協力』の第15号が発刊された。今号には、『つながりあう いのち』とその未来のために―女性宗教者に期待するもの―』をテーマに開催した2020年度平和大学講座を特集として、平和研究所員及び外部招聘講師1名による2020年度の研究報告を掲載している。当年度の研究テーマは、『慈しみの実践・共通の未来のために―つながりあういのち』。本誌に収録された研究報告は多彩で、現代において、宗教に基づく平和の実現、他者への慈しみの実践の手がかりを求めたものである。(A5版・220ページ・頒価800円)



今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

新机(しんき)

WCRP事務局オフィス内が、4月から心機一転変わります！ こうご期待！

WCRPの活動

《3月》

- 8日 気候危機タスクフォース(東京・普門メディアセンター/オンライン併用)
- 10日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備(埼玉・所沢) *28日も同
- 14日 第43回理事会・平和大学講座(京都・賀茂別雷神社/オンライン併用)
- 15日 気候危機タスクフォース「いのちの森地権者との懇談会」(埼玉・所沢)

《4月》

- 18日 和解の教育タスクフォース第4回会合(東京・普門メディアセンター/オンライン併用)
 - 23日 人身取引防止タスクフォース第4回会合(オンライン開催)
 - 27日 災害対応タスクフォース第4回会合(東京・普門メディアセンター)
 - 29日 シリア留学生交流会(東京・立正佼成会法輪閣第5会議室)
 - 30~31日 平和研究所合宿(静岡・熱海)
 - 10日 ストップ！核依存タスクフォース第1回会合
 - 12日 青年部会第1回幹事会(京都・立正佼成会京都教会)
 - 13~14日 女性部会宗教別学習会/第1回委員会(兵庫・円応教)
 - 25日 平和研究所第1回所員会議・研究会(東京・普門メディアセンター)
- 掲載内容の無断転載を禁ず。